

東京バッハ合唱団 月報

[第 737 号] 2023 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.737

November 2023

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

—旧稿再録—「月報」第 405 号 (1996 年 3 月)

人に仕えるクリスマス——東京バッハ合唱団への讃辞

諏訪 治男 (足利YMCA)

今年も、10 月に入り、もうクリスマス、新年などの大きな年中行事を準備する時期になって来ました。私 (大村恵美子) だけではないと思われるのですが、今は世の中全体が消極的な気分になり、何事も控えめになって、これまで続けてきた行事なども、無視または手控えるようになったと感じるのは、コロナ禍などのせい、私の周囲だけの雰囲気ではないような気がします。

私は、東京バッハ合唱団という演奏団体を 1962 年につくって、去年 60 周年を迎えたところですが、今はその 40 周年の記念誌『東京バッハ合唱団 40 年の記録』(2002 年刊) を取り出して読み直しています。さいわい長寿を与えられて、引き続きグループを維持しています。

最近も、地方の活動に従事しておられる元団員の方が練習場を訪ねていらして、「大村先生は 90 歳を超えられているとのことですが、合唱に対する指摘はうなづくことばかりで、全く年齢を感じられない指揮ぶり、驚くばかりでした」(吉村雅典氏) と、有難い感想を述べて帰られたのが、私自身も「ご褒美」のように受けとれます。それも、誰でも受けつける J. S. バッハの音楽の包容力の賜物なのでしょう。

ときどき幸福感と共に読み直す、過去の感想文の一つを、皆様にご紹介して、この合唱団の、すばらしい歴史を振り返っていただけるよう、1996 年の年初に頂いた月報用の記事を、ここに上記の 40 年誌から再録して、ご紹介することに致します。

筆者の諏訪治男氏には、再掲載をお断りしておりますが、お許しいただくことを願いながら、改めて感謝を申し上げます。

1995 年の 1 月と 3 月、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件がたてつづけに起きて、社会が騒然としたことを覚えていらっしゃる方も多いでしょう。その年末、東京バッハ合唱団は、足利YMCAの主催による「足利市民クリスマス」へのお招きを受けました (12 月 16 日、足利市民会館小ホール)。

30 年近い歳月のかなたですが、クリスマス・シーズンが訪れると思えば浮かべます。クリスマスの、ひとつの理想的なやりとりだったようにも思うのです。

私たちも、「昔はさかんだったのだなあ」などと他人ごとのように思わずに、この現在も、活発だった頃の私達の歴史を参考に、また独自のたのしい歴史をこれからも造っていきましょう。

「天国」入りを近々と控えている、この老いた私も、生きる限りは、年齢などにこだわらず、タクマシク人生を彩ってゆきたいと思えます。皆様の善意に充ちた応援のお声を、心に抱きつつ。(大村恵美子)

バッハの楽曲を聞く時、私達日本人には想像するしかなないバッハのキリスト教理解に基づく世界観を深く感じさせる所が多く、又それは、いかにも彼を生み育てたドイツの風土と、中世からの深いキリスト教の精神と伝統に根ざしたものが、複合して醸成する香り高いものを思わせられ、しかもそれは、そのまま、聞く側にとっても、神の栄光を讃美する清らかな思いに高められるように思います。

去る 12 月 16 日 (土) 東京バッハ合唱団の皆様には、足利市民会館での演奏会をお引受けくださり、本物のバッハの「クリスマス・オラトリオ」を堪能させていただきまして本当に感謝いたします。私達足利市民にとりましては、皆様のご来演は、1987 年 3 月の足利教会の献堂記念演奏会以来 2 度目でありましたが、あの時の感動を再び味わうことが出来ました。

当日演奏会を大いなる喜びの中で迎えることが出来た方が、音楽による讃美のあり方を味わうと同時に、すばらしい翻訳による歌詞をプログラムで追いながら、深い共感を得て、もう一度読み返し、主の降誕劇を目の前に見るような思いを体験したことを語られ、当日の実行委員の一人としても、私は大変喜びに思ったことであります。

おそらく、ドイツの聖トーマス教会においてはあの「クリスマス・オラトリオ」を今日も尚、18 世紀にバッハが演奏を続けて以来、連綿と継承されて来ていることと思う時に、戦後 50 年目の節目の年に、図らずも惹き起こされた阪神大震災と、サリン事件とが、符合するような日本の現実、あまりにも大きな歴史の落差とも思えるような状況で、人間の破滅を感じさせるものでした。

主宰者の大村恵美子さんの演奏に先立つメッセージの中で、バッハによって示された「クリスマス・オラトリオ」を通じて、神の正義と、愛に支えられた勇気を持つことを示され、又それがクリスマスだけでなく、新しい年の指針ともなるべきものであることの意

月報 2023 年 11 月号 CONTENTS

- ・ 萬葉集の世界、ふたたび (大村恵美子) …p. 2
- ・ お便り (森井幸子) / シングインのご案内…p. 3
- ・ 連載: 退屈するのはいそがしい [33] (大野博人) p. 4

味を、深く考える静謐の時でもありました。

特に演奏会の前後、短時間のリハーサル、場所の移動などのように、日ごろの東京バッハ合唱団の皆様の統率のとれた行動には、練習だけではない、精神的な絆の強さを感じ、実行委員としては、不安も消えて本当にその心遣いに感謝の拍手をお贈りしたいものと考えた次第です。本当に遠路遥々、素晴らしい演奏会を有難うございました。又いつの日か、この感動を再びお与えくださいますように。

足利YMCAのクリスマス

大村 恵美子（主宰者/指揮者）

YMCAのお台所から会場のリハーサル室に2度も運びこまれたあたたかいミネストローネ・スープ、チーズ・ホットサンドの昼食と、丹誠こめた夕食弁当。会場正面に高々と掲げられた演奏会の美しく大きな看板。本番のこまかい裏方作業。自家用車分乗の送迎。きめこまかなYMCAの方々のみごとなチームワークぶりに、「みなさんのクリスマス会はいつですか?」と伺うと、「今日のこれが私達のクリスマスなのです」とのお答え。まさに「人に仕える」クリスマスの心の実践なのでした。歌ってこんなにさわやかな感謝の気持ちにみたまされて帰ったことが、団員全員にとっても素晴らしいクリスマス・プレゼントでした。ほんとうにありがとうございました。

萬葉集の世界、ふたたび

大村 恵美子

私の小学生時代の担任の先生は、「萬葉集」の作品も、私たちによく紹介して下さった。現在でも、思わぬ処で、あれ、と思うような意外な人が、萬葉集の中の作品をすらすら口ずさんでいたりするので、日本人の中では、かなりの人たちがこれに通じていて、日常ふと口に出る程度にまで親しんでいるのかと、ほほえましくなってくる。

最近私は、ひとに差し上げるつもりで、萬葉集の全4516句を手書きした。そしてこの機会に、自分がどんな作品に共鳴するのか、検討してみた（一部右掲）。

初見の頃の、若い私だったら、あれもこれもと、大いに欲張っていたようだが、年齢とった現在では、それほど心から共鳴するようなものは意外に少なく、「日本人はあまり深く考えるよりも、すぐ泣き出したりするんだな」とか、「萬葉集」そのものに対して、昔ほどの喜びよりも、「日本人」への批判的な評価が浮かんできたりする。

私が「いいな」と思うようなものを考えてみると、「美しい風景描写」が圧倒的に多く、一方、現代に近づくに従って殖えてくる、人間の心の深い動きをうた

熟田津に船乗りせむと月待てば
潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（額田王）
あかねさす紫野行き標野行き
野守は見ずや君が袖振る（額田王）
東の野にはかぎろひ立つ見えて
かへり見すれば月西渡る（柿本人麻呂）
巨勢山のつらつら椿つらつらに
見つつ偲ばな巨勢の春野を（坂門人足）
笹の葉はみ山もさやにさやげども
我れは妹思ふ別れ来ぬれば（柿本人麻呂）
田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ
富士の高嶺に雪は降りける（山部赤人）
憶良らは今は罷らむ子泣くらむ
それその母も我を待つらむぞ（山上憶良）
秋さらば見つつ偲べと妹が植ゑし
やどのなでしこ咲きにけるかも（大伴家持）

近頃の私が共鳴する作品の一例

ったものは、当然ながら多くない。

私個人の好みに左右されるせいかも知れないけれど、周囲の人たちが、自分たちの「恋愛」を知ってしまうのじゃないか、というような、心配がとて強かったように思われる。「恋」なら「恋」そのものを表現すれば、と思うのに、周囲の目を恐れる気持ちのつよさのほうが目立つ。そんな処に私の批判は注目してしまうのだが、“いいおとな”が、自分の作品を公開したら現実の「恋」がバレることに、そんなに拘るのだろうか、と考えてしまうのである。

とにかく、人間関係の心理描写などよりも、圧倒的に「美しい風景」の描出にすぐれたものが多いのは、たぶん、周囲の人々との噂を相当気にしながら、大事な自分の「恋愛」を守ってきた人たちに同情しながら、「萬葉集」さえも味わうことになってしまっているかと、情けない。



■昭和記念公園の紅葉
撮影・千葉光雄（2022年11月）



■豊沢川と黄葉 (花巻・鉛温泉)、撮影・千葉光雄 (2022年10月)

お便り：森井 幸子様 (故・森井眞先生ご夫人) より

お送りいただく月報を通じ、皆様のご活躍を伺わせていただいております。

この度は 夫 眞の昇天に際し、お心のこもったお花をお供えくださり、誠にありがとうございました。

「バッハ合唱団」では沢山の方々との楽しいお交わりを頂戴し、多くの貴重な思い出を作ってくださいましたことと存じ、改めて御礼申し上げます。

主人も最期までバッハの音楽を愛して、103歳10カ月の生を全ういたしましたことは幸せでございました。

皆様の今後ますますのご活躍を祈念し、御礼に代えさせていただきます。

< 消息 >

森井 眞様…2023年8月10日歿、103歳 (1919年生) (団友、1962～1975年当団バス団員)

*

「月報」読者の皆様に提案

大村 恵美子

中学生の読者の方からも、「月報、いつも楽しみにしています。これからもずっと続けてね」と、何度も依頼を受けている、この月報のことです。

私は、力が残っている限り、他界するまでは止めないで発行し続けるつもりですが、私達がこの世に生を受けて、また神のもとに帰る日までの貴重な年月は、自分だけでなく、知人のそれぞれの一生も、覚えるに価するものです。

それで、私からの発案ですが、月報に、上欄に掲げたような「消息」のコーナーを設けて、記憶にとどめたいと考えました。

ご紹介は、どんなにお偉い方でも、この世の肩書などには触れず、どなたも一様に、当団との関わりのみとします。採り上げるお名前は、勝手ながら、私・大村恵美子または事務局に、ご消息が届いた方のみとさせていただきます。関係の方がたのご協力とご連絡をお願いします。

—聴くもよし、歌うもよし。楽譜用意あり—

クリスマスにシングイン!

“マニフィカト” (全合唱曲+挿入曲 ABC)

“クリスマス・オラトリオ” (Ⅱ/Ⅲ部全コラール)

- ① 12月2日 (土)、荻窪教会、14時-16時
 - ② 12月9日 (土)、三崎町教会、14時-16時
- 開場：13時30分 (両会場とも)

- ・客席から合唱にご参加いただけます。
- ・経験者をご自分の楽譜持参で (原語/訳詞、可)
- ・初心者の方でもご遠慮なく、バッハの合唱を体験してみてください。・もっばら鑑賞、もちろん歓迎です。

< 演奏者 >

[管弦楽] コレギウム・アルモニア・スペリオール・ジャパン (略称ARS)

[オルガン] 田尻明葉、[指揮] 大村恵美子

[合唱] 東京バッハ合唱団/ご参加のみなさん

< 入場参加 >

- ・入場参加費…1000円 (楽譜代・資料代をふくむ)
- ・会場①…定員50名 (予約優先)
- ・会場②…定員150名 (予約優先、当日枠たっぷり)
- ・参加申し込み [①②とも] …東京バッハ合唱団事務局 03-3290-5731、office@bachchor-tokyo.jp
- ◆ご予約者は、11月11日以降の通常練習に参加可 (無料。HPで練習日程をご参照ください。楽譜あり)

< 会場ご案内 >

① 荻窪教会…JR/メトロ「荻窪」駅南口8分

〒167-0051 杉並区荻窪 4-2-10、☎03-3398-2104

② 三崎町教会…JR/地下鉄「水道橋」駅東口4分

〒101-0061 千代田区神田三崎町 1-3-9、☎03-3295-4471



↑①荻窪教会、12/2

↓②三崎町教会、12/9

◆上演用歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

<連載随想>

退屈するのはいそがしい [33]

ざわつく読書

安曇野閑人 大野 博人



どこかで似たような話を聞いたおぼえが……。

最近、フランスの文豪バルザックの名作「幻滅」を読んでいる、そんな気がした。物語は複雑だが、軸になるのは文才にめぐまれた田舎町の青年リュシアンの話。大物になろうとパリに出て上流社会にいったんは食い込むものの、利害や嫉妬が渦巻く大都会で野心が空回り。落ちるところまで落ちて、故郷アングレームに暮らす妹たちに、とんでもない心痛と負担をもたらす。

似た話を思い出そうとしていると、ある映画の主題歌が心に浮かんだ。

「どうせおいらはヤクザな兄貴、わかっちゃいるんだ妹よ／いつかお前が喜ぶような偉い兄貴になりたいくて／奮闘努力の甲斐もなく 今日涙の、今日涙の陽が落ちる、陽が落ちる」

ご存じ「男はつらいよ」の主題歌（作詞：星野哲郎、作曲：山本直純）。名曲である。聴けば聴くほどリュシアンと重なる。もっとも寅さんとちがって、リュシアンは、バルザックが造形した青年たちの中で一番の美男子らしいが。

などと勝手に妄想をふくらませながら、大傑作の世界にぐいぐい引き込まれていった。だが、楽しいというには、ちょっと胸がざわつく読書でもあった。

なにしろリュシアンがパリで身を立てようとしたのはマスコミ業界で、なのだ。記者の端くれだった身には、人ごととは思えない。たしかに舞台は200年も前のフランス。しかし、当時のマスコミ界の描写は今も生々しい。

演劇担当記者が、劇場とのくされ縁で記事に手心を加えたり、新聞社が損得を計算して権力者になびいたり。リュシアンも私怨を晴らす記事に手を染める。

「ジャーナリズムは地獄だ。墮落と嘘と裏切りの奈落だ」

「新聞は、聖職者ではなく、党派のための手段になってしまった。そして手段からさらに商売に。あらゆる商売と同じように、信念もルールもない。新聞はみんな、大衆がほしがる色の言葉を売る商店なんだ」

「新聞はもはや世論を啓蒙するためではなく、それにこびるために作られる。そして、どんな新聞もそのうち、卑劣で偽善的で下劣で嘘つきで悪意に満ちたものになっていく」

容赦ない記述が続く。ただ、これらは小説の中で、ジャーナリストたち本人が語る言葉でもある。救いのない自嘲。

バルザックさん、そこまで罵倒しなくても、とちょっと落ち込む。でも、解説や評伝によると、実は彼自身もマスコミの世界にどっぷりつかっていた。

記者として作家の権利を擁護する論陣をはり、作家としては新聞に連載小説を書いた。新聞連載のパイオニアのひとりで、多くの小説を連載のあとに本として出版していたらしい。それどころか、文芸と政治を専門とする月刊誌を買い取り、その編集、経営に乗り出す。そこでは政治評論や国際情勢分析まで書いていたという。

滑り出しはよかったそうだ。けれど、まもなく立ちゆかなくなる。執筆陣に名を連ねていた著名な作家や言論人があまり書いてくれず、ひとりで書きまくる羽目に。本人がほかで約束していた原稿書きが追いつかなくなった。さらに、もめ事が重なりついにお手上げ。ただでさえ莫大な借金がまた増えた。そういえば、小説には「どんなに抜け目のないジャーナリストも、利害がからむ商売となると間抜け同然だ」という言葉も。自分のことだったか。

マスコミ業界のリアルな描写も痛烈な批判も、作者自身のかなり苦い経験がもとになっているようだ。業界人たちへの恨みも相当深かったのでは。

とはいえ、「もしマスコミが存在しないのだったら、そんなものは決して発明してはいけない」とまで、登場人物に毒づかせるとなると……。はるかに出来の悪い後輩記者だって、反論したくなる。

それを言っちゃあ、おしまいよ。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■ 19世紀のフランスの新聞漫画。バルザックとも仕事をしたドミーエの作。スイスの友人がくれた切り抜き（説明は筆者）